

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2011年9月21日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.55 「目的に合う『叱り方』」

新内閣が発足しました。国民の期待も高かったようで、各メディアが発表した支持率は件並み 60 パーセントを超えました。ところが、発足後 10 日も経たないうちに、経済産業省大臣の鉢呂氏が辞任してしまいました。原因は、軽率な発言です。

「周辺の町は文字通り死の町となって…」

報道陣に防護服を擦り付けながら「放射能を移してやる…」

前者の発言は、早期帰宅を望む被災地の方々の感情を逆撫でしたかもしれませんが、他国ならば辞任に追い込まれるような過失ではありません。後者の発言は、非公式の「オフレコ」時に発せられたようです。実に子供じみた幼稚な発言ですが、それでも辞任しなければならないほどの過失とは思いません。本来、政治家の出入進退は政策の誤りによって生じるべきです。明らかに重大な政策失態がありながら、のうのうと重責に就き続ける政治家がいる一方、小さな失言で辞任（罷免）に追い込まれる政治家が多く存在するのが日本の特徴です。アメリカでは大統領の女性スキャンダルが大々的に報じられ、本人も「不適切な関係」を認めながらも辞任せずに任期を全うしました。「倫理的責任と政治的責任は別」という考え方があるからです。ところが、「徳」を重んじる日本ではそうではありません。政治的能力よりも徳力が優先されるのです。

私は、だから鉢呂氏の辞任が間違っていると言いたいわけではありません。日本では徳を失った者は絶対に支持されないという事実を指摘したいのです。

これはビジネスの世界でも同じです。私が感情の論理を訴えるのは、相手の感情に配慮しない人物は徳が低いと評価され、どれだけ能力が高くても支持されない現実があるからです。

ニーズで成り立つビジネスは、本来、その能力で選択されるべきです。例えば歯科医院を選ぶ時を考えて下さい。本来、誰もが歯科医院に行くことを望まないはずで

行かなくて済むなら行きたくない。しかし、歯の痛みに耐えかねて仕方なく歯科医院を訪れます。それならば、本来、最も腕のいい医者を選んで行きそうなものですが、実際は違います。

「あその医者は優しい」

「あその医者は子供が泣くと不機嫌になる」

…そんな治療技術とは無縁の要素で選ぶことが普通です。もちろん、我々素人はプロの技量を判断できないという理由が大きいのですが、「人柄（徳力）」に左右されると一面も物語っています。

塾も歯医者と同じくニーズで成り立つビジネスです。腕がいい…学習指導技術に優れているというのは必要条件ですが、それだけで十分条件にはなりません。

私が「よい授業をしていれば、自然と評判が広がり塾生が集まってくる」と考えるのは間違いだと主張する理由もココにあります。

宿題を忘れてきた塾生に対する叱り方1つをとっても、十分な配慮ができていないか。スタッフに叱り方の研修をしているか。それが問われています。多くの塾が感情に任せて叱りますので、生徒の人格まで貶める結果を招いています。「叱る」という行為は、教師の自己満足のためにあるのではなく、生徒自身をプラスの方向に変えるためにあります。当然、その目的に合う「叱り方」があるはずで

す。徳力というのは目に見えません。それを計るのは相手の感情です。「叱り方ひとつでも、ココまで考えて配慮してくれているんだ」と生徒に、保護者に伝わった時、あなたの徳力は向上します。鉢呂経産大臣の辞任を他山の石と受け止め、自らが発する言葉の意味を考えて下さい。政治家の言葉は重いと言われるますが、我々指導者の言葉も、やはり重いものです。

第7回 どこが変わった小学教科書?理科・社会編

朝夕は少しずつ過ごしやすくなってきています。節電の夏がまもなく終わり、赤トンボが飛び交う季節が訪れてきました。私はもっぱら食欲の秋ですが…笑。

さて、今回も本題に入る前に話題を一つ…。

「心のノート」というのはご存知でしょうか。これは、小中学校道徳の授業で配布されているノートです。児童生徒が身につける道徳の内容をわかりやすく表しており、道徳的価値について自ら考えるきっかけとなっている書き込み式教材です。学校生活や家庭生活など日常生活において、友達との接し方や自分の心の育て方などいろいろな人間教育に生かされています。近年、いじめ問題や家庭内問題などさまざまな精神的トラブルが多発しています。先日母親がわが子を刺すといった恐ろしい事件も起きています。保護者や子供たちの様子はもはや学校や家庭だけでなく、学習塾でもカウンセリングする時代がきているのではないかと思います。参考までに一度ご覧になっていただくと幸いです。

【心のノート】

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/07020611/020.htm
.....

さて、本題にいきましょう。

今回のテーマは小学理科・社会の二教科について、新指導要領の内容を再確認していきます。すでに新しい教科書を使用している状況ですが、入塾説明会や保護者説明会でも使用できる資料を交えて話をします。

では、まずは理科から。

理科は全国学力テストにも新規導入が決まり、注目度の高い科目です。授業時間数も大幅に増加し、従来の中学生内容が数多く小学生の授業に導入されています。

今回も「単元配当表」の URL を記載していますので、ぜひ保護者説明会や入塾説明会の資料としてご活用ください。もちろん生徒に配布してもOKです。

【東京書籍】

<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/subject/rika/rika-03.pdf>

【啓林館】

http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/new_karikyuramu/data/23nen/rika_naiyou23.doc

理科の改訂のポイントはいくつかあります。まず見た目に2点。

①合冊になった

…以前は上下二分冊でしたが、今回の改訂より合冊になりました。

②サイズが大きくなった

…横幅が大きくなったことにより、イラストや写真が増加。

改訂のキーワードは「研究」。生徒が理科に関する研究をし、発表をすることで、自分たちから進んで学習する形式が多くとられてい

ます。小学理科と中学理科とでは観点が異なり、小学理科は暗記重視になっていないことも重要なポイントです。小学理科はあくまで中学理科の基礎作りであり、体験学習を数多く行うことで、理科に対する興味を持つようにしたいという意向があります。改訂以前の中学生が苦手としていた単元である「天気」「電気」「てこ」「ばね」など中学理科につながる学習を早い段階で取り入れたのも特徴的です。

次は社会です。今回の改訂では理数系教科が注目されていますが、社会は意外と大きく変わっています。

【東京書籍】

<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/subject/syakai/syakai-03.pdf>

【教育出版】

http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/pages/textbook/h23-es/H23_s_syakai_syuisyo_all.pdf

【日本文教出版（旧大阪書籍）】

http://www.nichibun-g.co.jp/download/s-shakai/h23/naiyo/h23s-sha_naiyo04.pdf

大きく変わったのは地理。地球儀の導入や白地図の学習を多用し、体験学習を増やしています。小学生の間に都道府県や県庁所在地を覚えさせ、日本地理の基礎を養います。平野名や河川名も白地図で学習します。また、各地域の特色の内容が増加しました。各県の名産品や工業、農業など詳しい情報が多数掲載されており、日本国民として自国の知識を多く身につけられるような内容になっています。

歴史はイラストや図解、写真を多く掲載し、イメージをしやすいような形式になっています。縄文時代からの内容も戻ってきて、ボリュームが増えました。領土についていろいろと問題になっている教科書もあるようですが、教科書の採択については各地方教育委員会が決められているので、ここでは触れないようにしておきます。また、民主党政権になり、近代の政治内容が新しい表現になっていることも注目です。

社会も理科同様に資料問題が多くなり、研究課題が多く取り入れられています。レポートなどの発表が授業で頻出しますので、学習塾でも取り入れることができればいいのでは…と思います。

理科と社会は中学入試に必要なという考えが一般的に多いでしょうが、今回の新学習指導要領を見ると、中学生につながる内容になっていることが多いです。特に理科は全国学力テストにも導入されるので、小6公立コースなどでは必須の授業として小学理科を学習塾の運営に入れるのも一つの手段かと思います。

今回は、いよいよ新しい中学校学習内容について説明をしていきます。では、また。。。

■質の高い塾だけが生き残る

—景気低迷で大変厳しい経済状況ですが、

どのような塾が成長発展していくと思いますか？

「私はこれまでの企業のM&Aについて、日本だけでなく海外についてもかなり調べてみました。すると、今後は『好調な企業同士がつながっていく時代になる』ということが色々な本に共通して書かれており、会った方からも同様のことを聞いたのです。つまり、以前のM&Aは、資金力のある強い企業が衰退しそうな企業を拾う、または救う形で行われましたが、今後は成長企業同士、トップシェアを争っている企業同士が手を組むM&Aが、圧倒的に増えていくわけです。日本の民間教育業界も、中学受験のトップ進学塾であるSAPIXが大手予備校の代ゼミグループに入ったように、質的に高い企業同士の提携が多くなると予想します。そうなれば、シェア獲得にも拍車がかかり、そう簡単には他企業に負けませんからね」

■特化した指導力と営業力しか評価されない？

—そうした塾の質の高さとはどのような部分だと思いますか？

「単に難関校に合格させる指導力があるだけでなく、はるかに競合を引き離す特化した指導力があること。これは、同時に確実性のある営業力にもつながるのです。つまり、黙っていても生徒が集まり、くどくど説明しなくても親がついてくる、そのような分かりやすい塾、それが注目され評価される塾なのです。

個別指導でも集団指導でも、幼児教育でも、他の追随を許さないノウハウを持ち日々進化している・・・でもFCなどの展開はしない、それが強みになるのです。金をかけた営業をしなくて済むからです。

ろくなノウハウも無く、下手な宣伝ばかりしているFC本部があるとします・・・そのような塾と提携しても上手くいくはずがありませんね」

—ノウハウが乏しいのにFC展開している本部もあるわけですね。何が目当てなのでしょう？

「ノウハウとツールを持つ本部がFC展開をして規模を拡大していく、これは言い換えれば『M&Aの別の形』とも言えます。ただし、資本提携などではなく、本部が一方向的にロイヤリティや教材費、ツール配信料などを請求してくる場合もあるわけです。

教材開発に多額の資金を投資し、熟成されてもいない教材を有料でFCに配布したらミスばかりでクレームの山・・・ということも有り得るわけですが、本物と偽者の見分けのつかないFCオーナーだと、痛い思いをするだけです。

自転車操業的に経営が傾きはじめて企業ほど、無理な投資をして新たな試みをしますが、FCオーナーがいる場合は、彼らとそのツケを払わされるのです。本部がFCオーナーのふんどしで相撲をとり、負けても自分のせいじゃないとする、こんな無責任な関係は今後急速に消えていく運命にあります」

■特化した塾同士のギブギブの関係

—今回の資本提携はどのような経緯と意図があるのか教えてください。

「私は周囲の人がどのように評価しているのか、競合がどう噂しているのか・・・そのようなことは一切耳に入らず、自分の目と耳だけで相手を評価し、プラスとマイナス、そして特化した部分はどこかを判断します。

金塊であれば誰が見ても、重さを量って一目瞭然に価値がわかりますが、塾の場合はそうはいきません。しかし、最初から色眼鏡で見れば、本当の価値を見極めることはできません。

そのような目で見て価値が高いと判断したので、資本提携を持ちかけました。相手もこちらを調査して、同じように価値があると判断したから手を組むことが可能になったわけです。これは誰が紹介したからとか仲介したからとか、そういうものではなく、お互いに裸になってみて価値を認め合ったから、ギブギブの関係が構築できたと私は思っています」

ドイツの哲学者ゲーテは「格言と反省」で次のように言っている。

『自分の知っていることは自慢し、知らないことに対しては高慢に構える者が少なくない』



備えあれば憂い無し

東日本大震災のあと、各地の塾が「災害対策用備品」の整備と「災害対応マニュアル」の見直しを行っています。そのベースとなっているのは、仙台市に本部を置くS塾が作成した「震災の記録」であり、K塾の塾長が震災直後からブログにアップしていた「震災日記」です。

現実的に貴重な体験を重ねた両塾の記録は、そのような体験の乏しい各塾にとっては何ものにも換えがたい「宝物」となっています。

「色んなことを学ばせていただいています。知識先行にはなりたくない。万一の時の実行が伴うように、定期的な訓練もしたいし、被災地の塾との交流を経て、できるだけ情報と体験を共有したいと思っています」と語るのは、東海中部地区の大手N塾長。

今回の震災では、遠く離れた地域でも、水や米などをはじめとする食料品の買い漁り、ガソリンを常に満タンにしていなくて不安になる異常な精神状態が全国に広がり、かつての「石油ショック」の際のパニック的な状況を思い出した人も多かったようです。

しかしながら、パニックに陥らず冷静に対応した人たちもいました。特に被災したS塾やK塾の社員の多くが、生徒やその親のことを最優先に考え、沈着冷静に判断し行動しました。それでも「反省すべきことは色々あった」と語ります。

ですから、何よりも「心の備え」が大事になってくるのです。

自分力UPのために・・・

想定外の地震と津波は、人間の想像力をはるかに超える破壊力でした。S塾に近いH塾幹部は「企業として組織として、どれほど対策を講じていても無理がある」と語ります。

「日本という国の民族は、元々個人一人ひとりの能力が高かったわけですが、戦乱が国内から国際化へと進むほどに集団の力、つまり組織力や団結力が優先されるようになりました。これを少しだけ戻して、個人の『自分力』をUPさせないと、大きな災害の時には役にたたず、逆にお荷物の人材になってしまいます」

しかし、これでも万全とは言えません。今回は港や原発が破壊されましたが、次回は何が破壊されるか予想もつかないからです。今回の地震をはるかに超える規模の大地震が起きる可能性も指摘されています。

「しかも、一カ月後の余震で授業再開がさらに一ヶ月延期となるという事態もありました。今回の災害が一過性のものではなく、さらなる災害の前兆になったり、引き金になったりしているのです。これをベースとしていても、それ以上のことが必ず起こり得るのだという覚悟も必要だと思います」

阪神淡路大震災のあと、毎年「震災対策技術展」が全国各地の都市で行われており、国はライフラインの整備や災害時のレスキュー技術の進歩、一般企業からは免震構造の開発や地域支援のコンビニの対応などについて研究成果や実際の取り組みの発表があります。しかし、それぞれの家庭の取り組み、そして個人個人の災害に対する意識の向上が図られなければ、災害の被害はより大きなものとなってしまいます。